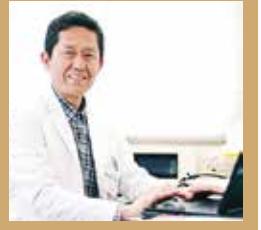


『二度の演奏会の間(はさま)で…』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



暮れも押し迫る頃、札幌の病院から終末期がん患者さんの訪問診療の依頼があった。

紹介されてきた患者さんの名前を聞いて驚いた。その年の春、まだほんの8ヶ月ほど前に、クリニック併設のカフェで、長女さんと一緒に親子でお琴の演奏会をしてくれた方だったから。

親子で演奏会をしてくれた僅か一月ほど後、智子さんは胸焼けで近くの病院を受診し、胃カメラをしたところ食道癌がみつかり、直ちに食道癌で有名な札幌の病院に紹介され、抗がん剤治療と手術を行った。けれども、その後間もなく再発し、抗がん剤治療を再開するも副作用が強く治療は中断せざるを得なかつた。治療をしていた病院の緩和ケア病棟に入院することになったが、家からも遠く、また簡単に家族の面会もできない今の状況の中で、智子さんは家に帰りたい思いが募った。主治医から「週の単位の余命」と聞かされている状況の中で、家族もなんとか智子さんを家に連れ帰ってあげたいと願つた。とても仲の良い夫婦であり、同居する息子夫婦からも頼りにされている母親であり、一家の中心的な存在だった。

クリニック仕事納めの12月29日、智子さんは札幌の病院を退院し自宅に帰つて来られた。智子さんは薬剤師でもあり、自分自身の今の状況は十分に理解しているはず、心中はどんなだろう…と慮りつつ、ベッド上の智子さんに、「お久しぶりです」と声をかけると、智子さんは少し目を潤ませて軽く頷かれた。

痛みだけではなく、両肺に溜まっている水のために息苦しさもあり、症状を和らげるのに少し苦労したが、色々と薬を調整した結果、退院から6日後の1月4日に伺つた時には、息苦しさも和らぎ、すっきりとした明るい表情をされていた。本人曰く、「昨夜は3ヶ月ぶりにぐっすり眠れました」とのこと。家族も、「少し何かを食べたいという気持ちが出てきたようです。すごく楽そうになって嬉しいです」と喜んでくれた。これくらいの状態ならできるのではないかと思い、春に一緒にお琴の演奏会をし

てくれた長女の方に顔を向け、「来週、ここで一緒に演奏会をしようか」と声をかけた。長女は待っていましたとばかりに二つ返事でその申し出を引き受けてくれた。とはいえ、智子さんの状態は、いつ急変してもおかしくない状態であり、1日ですっかり状況が変わってしまうこともあるため、なんとかその日を無事に、また、少しでも智子さんが良い状態で迎えられるように、と願つた。

演奏会を予定していた1月12日、感謝なことに、良い状態でその日を迎えることができた。夫始め子どもたち夫婦と孫たち大勢の家族、智子さんの友人たち、訪問看護スタッフやケアマネなど沢山の人が集まる中、演奏会が始まった。長女のお琴演奏は見事だった。何ヶ月か前には、この娘と一緒にクリニックのカフェで演奏会をしてくれたんだよなあ…と思うと、僕にも込み上げるものがあった。魂を込めて何曲か歌わせてもらつた。長女と一緒に演奏もした。泣いている人ももちろん沢山いらっしゃつたが、智子さん本人は、柔らかい微笑みを浮かべた表情で、自分のために集まってくれたみんなの顔を愛おしむるように眺めておられた。貴い時間だった。その日の夜から智子さんの状態は急速に落ちて行った。2日後の14日夜、家族に見守られながら、智子さんは67年の人生の幕を静かに下した。

死亡診断書を手渡した後、夫と少し話をした。智子さんは、ドイツに短期留学するなど、元来非常に行動力のある人だつた。忙しくて長年どこにも行けなかつたが、薬局の仕事をようやく息子夫婦に譲り、少し時間の余裕もできてきたので、まずは一緒にホノルルマラソンにでも出ようという話をして夫婦でパスポートを取つた矢先にコロナ禍が始まり、この状況が明けたら一緒にホノルルに行こうねと話し合つていたが、それは叶わなかつた。未使用的のパスポートは棺の中に入れてあげようと思います、と呟く夫の声と表情は哀しく優しかつた。